



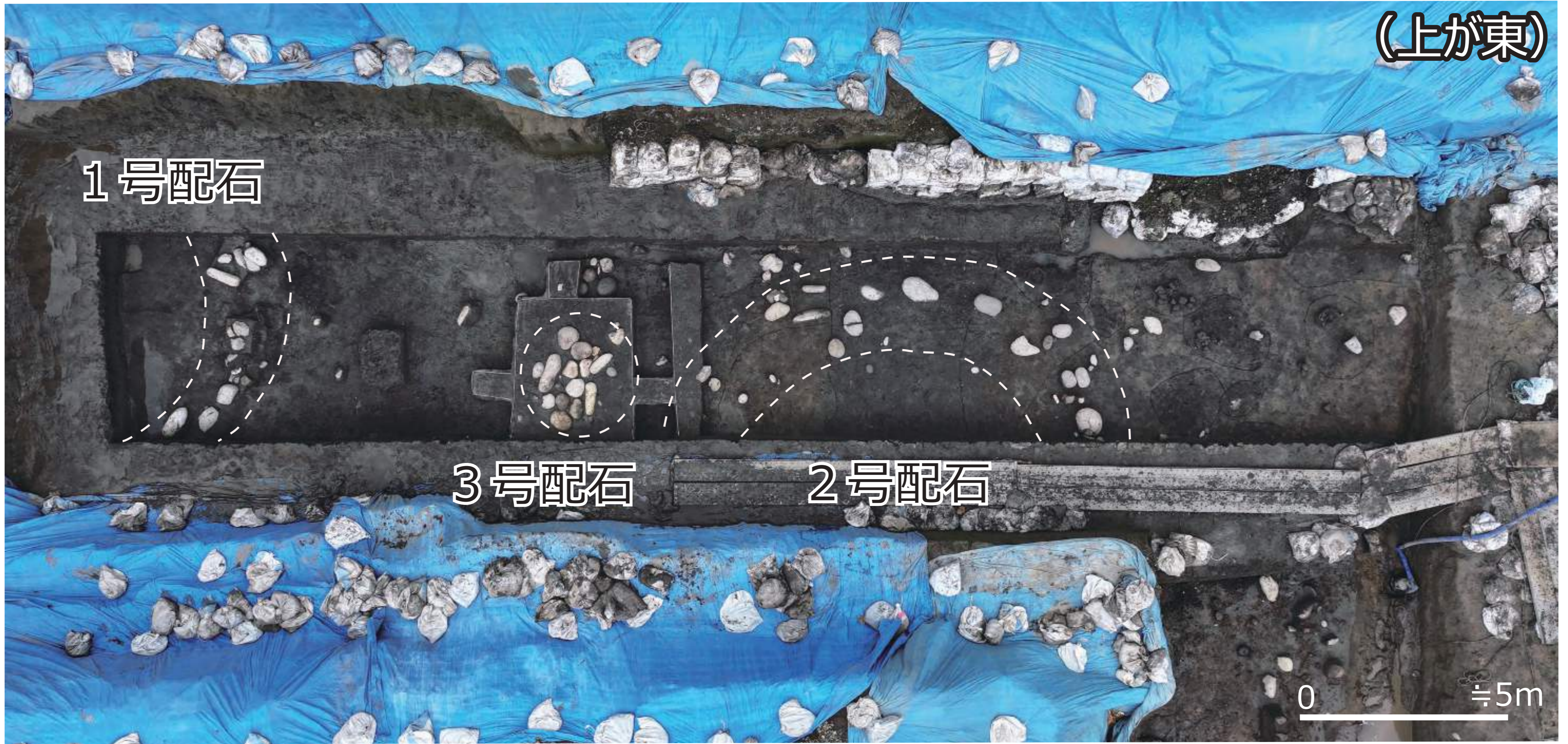
街中に眠る縄文時代のまつりの場

②山口遺跡・下ノ内浦遺跡 (仙台市太白区)



仙台市南部の名取川と広瀬川にはさまれた富沢地区に立地します。富沢地区では開発にともなう多くの発掘調査が行われており、旧石器時代から近代までのたくさんの遺跡がみつかっています。

今回は山口遺跡・下ノ内浦遺跡の間にまたがった範囲が調査され、縄文時代後期（約 4,000～3,000 年前）の配石遺構（石を並べた遺構）や焼いた動物の骨、土偶などの儀式やまつりに関係する遺物がみつき、縄文時代の文化を考えるうえでの貴重な手がかりとなりました。

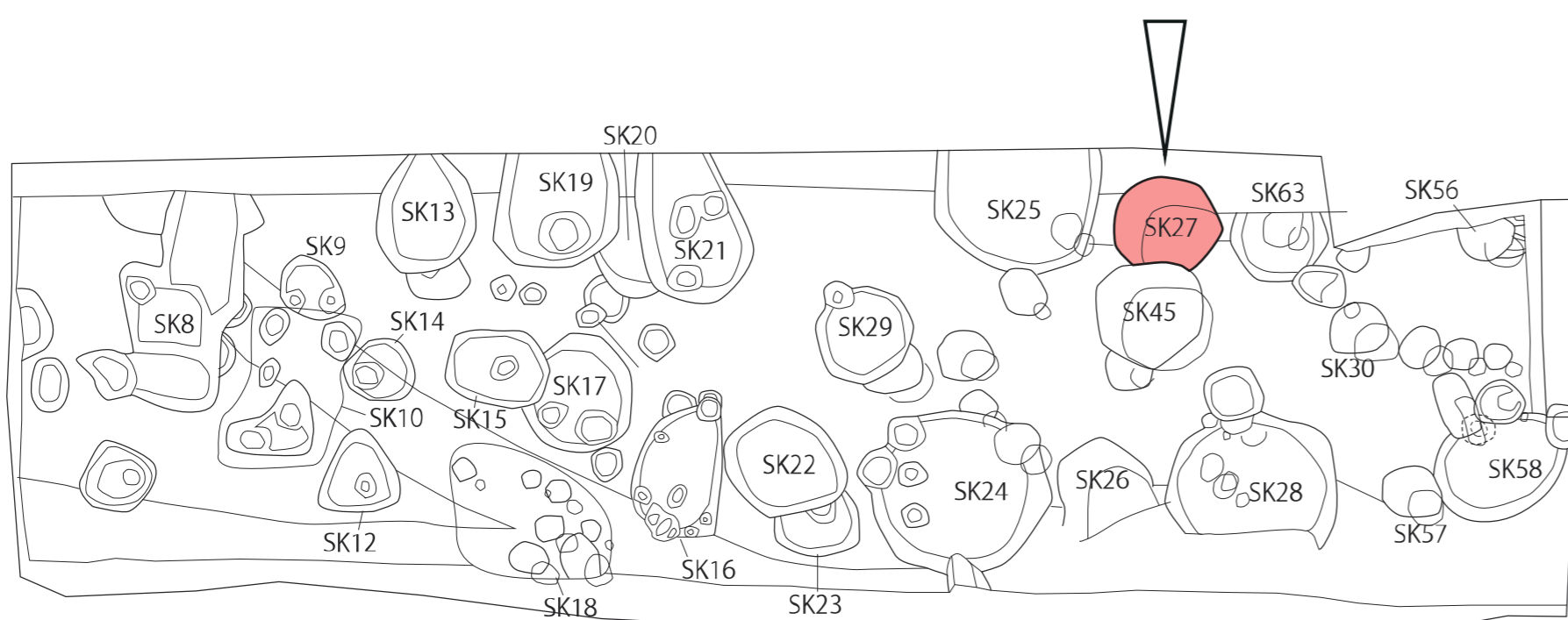


▲ **配石遺構**

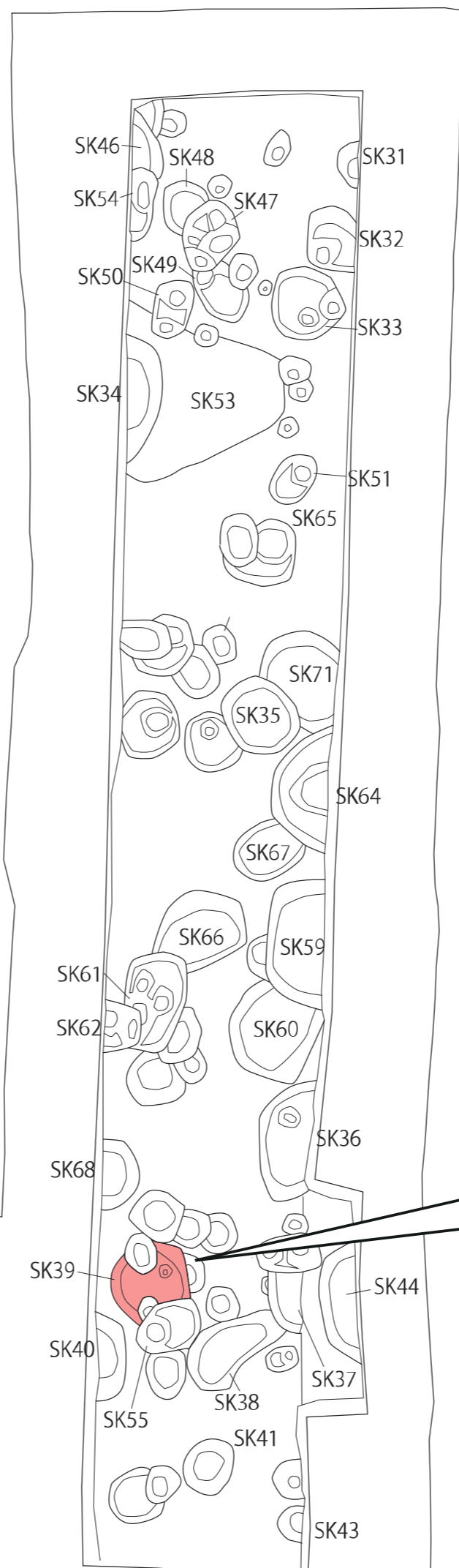
並べた石が弧を描くものと、1か所にまとめられたものがあります。石を並べるこの意味は分かりませんが、人々が集まるような場であったかもしれません。



▲ **まとめて出土した遺物 (27号土坑)**



▲ **縄文時代後期の層からみつけた穴の分布**



配石遺構の下層からは、穴（土坑）が数多く見つかりました。穴の中からは、土器や石器のほか、焼けた動物の骨や土偶がみついています。これらはなんらかの儀式・まつりに使われた可能性があります。

◀ **土偶**
(39号土坑)



人をかたどったものですが、胸から上が欠けています。

協力：仙台市教育委員会